

# 想うがままに

忘れがたき人<sup>③</sup>  
青年のまま逝った中島秋生さん

本誌編集委員 小寺山康雄

叱り飛ばされ感動した  
最初の出会

中島秋生(一九二一〜八三年)といっても、神戸以外のほとんどの読者はご存知ないだろう。

赫赫たる戦果を遺した英雄ではない。人格高潔な聖人でもない。書き遺したものとてほとんどない。しかし、白内障で視力を失い、骨髄腫で骨という骨がぼろぼろになってついに事切れるまで、叛骨魂を失わなかった戦士である。戦闘的で偉大な無名戦士であった。

中島さんとの最初の出会いは、六〇

何事か」と、罵声を浴びせられた。

十分遅刻したぐらいで怒鳴るやつは誰だと声の主を探すと、それが中島さんだった。年のころは五十五、六歳(と見えたが、実際は四十九歳だった)、髪の毛は見事な銀髪、顔の色艶はぼくの周囲の貧乏学生の誰よりもテカテカと輝いている。その人がまるで猩猩のように真っ赤になって吠え立てているではないか。

髪の毛のみごとさ故だろうか、ぼくには他の地区委員諸氏とくらべて、中島さんははるかにインテリジェンスに富んだ人物に見えた。その「インテリ」が「君は学生やからわからんかもしれんが、労働者は辛い一日の仕事が終わって飯を食う間もなく来とんやで。たつた十分遅刻しただけやないかと思うてるやろうけど、その十分は労働者の貴重な時間を奪ったと同じこつちやで」と、さきほどの恫喝とはうって変わった優しい声で諭すのだった。

年安保闘争の熱気も去った一九六〇年秋、ぼくが大学一年生のときだった。今にして思えば、日本左翼と労働運動の今日に至るとめどない潰走の始まりを画した、「所得倍増」の池田内閣が誕生した総選挙のための日本共産党東神戸地区委員会の会合だった。中島さんは灘居住細胞のキャップにして東神戸地区委員、対するぼくは入党して半年のぺいぺいだった。

当時、共産党は黨員数数万で、党の会合はすべて非公然であった。その秘密めいた雰囲気はいささか滑稽ではあるが、若いぼくにはいかにも前衛を自

ああ、これが共産党なんだ。生涯を捧げようと決心したのは間違っていないかつたと、ぼくは一も二もなく感激してしまった。思えばなんと純情な青年だったことか。今では醜く突き出た下腹をさすりながら懐かしく思い出されるのである。もつともその共産党をそれから一年足らずで見限ることになるのだから、青年の感激というのはまったくいいかげんなものだ。

「偉大な中島同志」から  
ただの「おっちゃん」へ

最初の出会いがこれほど緊張感にあふれ、中島秋生という人物を尊敬するに充分すぎるほどの出会いであったにもかかわらず、その後亡くなるまでの二〇数年間のつきあいは、それとはまったく異なる。だらけたものだった。娘は(ぼくが知らない娘も含めて)たくさんいるのに息子は一人もい

称する党に似つかわしいと思われた。

地区委員会の会場への地図は、事前に大学の便所に呼び出されて貰っていたが、その場で処分するのがきまりだったので手元がない。ぼくは会場を探すのにさんざん苦労したが、さりとて人に尋ねたり、ましてや交番で聞くわけにはいかない。ようやく会場にたどり着いたときには十分ぐらい遅刻していた。汗をふきふき入室したとたん、ドスのきいたといたいところだが、長嶋茂雄ばりのとぼけた甲高い声で「こらつ、この会議をなんと心得とる。学生の分際で十分も遅刻するとは

なかったこともあるかもしれないが、ぼくらの関係ははなはだぶしつけな関係だった。中島さんはぼくの父と同年の明治最後の生まれだが、実の親子以上にじゃれあつた関係だった。もつともぼくは生まれてこの方、父にじゃれるなんてことはしたことはないが。

ぼくらが中島さんの家に入り浸るようになったのは統一社会主義同盟の頃からである。会議やデモの帰りに「報告」と称して押しかけているうちはまだしも、そのうち酒を飲みたいというだけで連日連夜襲撃するようになっていった。勝手に家上がりこみ、冷蔵庫を開け酒とツマミを探し出し、一時二時まで、ときには東の空が白むまで「革命」を喚び、「代々木」と「ブンド」の悪態をつき、惚れた腫れたとうつつを抜かし、挙句の果ては反吐をまき散らかし、六畳一間しかない家で大いびきをかいて雑魚寝するのである。中島さんの家は、空襲の跡地を不法占有した

掘つ立て小屋だったが、この頃中島さん夫妻がどこに寝ていたか、そんなことは考えたこともなかった。

おまけに下宿代のない連中が、いつの間にか「下宿人」と称して居座るようになった(彼らは決して居候とは考えていなかった)。そのため中島さん夫妻はもう少し広い(といっても、六畳と四畳半の「文化住宅」だが)家に引越せざるをえなくなるのである。

このようにして中島さんは、ぼくらにとつていかめしい「中島同志」からだの「おっさん」、「おっちゃん」に格下げされていった。中島さんは「格下げ」に怒るところか、それまで頑なに纏っていた鎧を脱ぎ捨て、共産党時代には奥深く隠していた天性のおっちょこちよいの氣質をなんのはばかりもなく曝け出すようになっていった。

自慢の銀髪は二日に一回は卵の白身でリンスし、しみひとつない男前の顔は毎晩高級化粧品でパツクし、風呂に

なので、この辺でやめる。

中島さんのもうひとつの面は、少年時代から権威や権力に逆らってきたことである。旧制中学(神戸二中)時代、野球部に所属していたから運動神経は並以上なのに、軍事教練が大の苦手だった。身体がついていかないのではなく、精神が教練を拒否するのだ。「いざれお前たちも上御一人(天皇)の御為に一命を捧げる身だ」と、配属将校が訓示をたれるたびに、中島少年は「俺は死なんぞ。誰が死んだりするものか」と、腹の中で唱えていた。そして、学校をサポートしては親和女学校の生徒とデートし、十六歳の身で彼女を妊娠させてしまうのである。

ついに、あと半年で卒業というときになって、退学処分を喰らってしまった。処分理由は「この非常時に婦女子と戯れ、アカにかぶれている」ということだった。「アカ」というのは、共産党員だった長兄の本『蟹工船』を借り

はレモンを浮かべ、女性と会うときには身だしなみを整えるのに一時間はかけること。ぼくよりまだ数年若い女子学生に惚れ、彼女も俺に気があると妄想し、彼女に会うと胸がキュンと痛むなど、アホくさい「告白」を毎晩のようにかきされるのだ。

共産党時代には控えていたという競馬にこり、公営競馬場巡りをしだしたのもこの頃だ。これよりずっと後、中島さんの最後の仕事である神戸市営駐車場に勤めていたとき、詰め所に泥棒が入って、警察が現場検証に来たときのことである。何も盗るものがない泥棒が腹を立てたのか、なぜか中島さんが机の引き出しにしまいこんでいた数百枚のはずれ馬券をあたり一面にまき散らしていたのだ。その情景を律儀というにもドジな警察が「証抛写真」として何枚も撮ったというのである。このときばかりはさすがの中島さんもいたく恥じ入ったそうだが、それは競馬

て読んでいたからだ。

退学処分は中島さんの叛骨精神に火をつけた。退学後、船場の丁稚、馬丁見習い、外資系商社の雑役、日本エアブレーキの研磨工と、転々と職を変え。そのうち、海軍に徴用され、一九四一年にはついに召集されるが、中島さんは抗うことをやめなかった。徴用工時代は吹きっさらしの狭い小屋に暖房もなかったので、全員風邪を引き肺炎を患うものまで続出した。中島さんは一人で倉庫から毛布を無断で持ち出し、全員に配布した。その結果、「こんなことするのはアカにきまつている」と、気を失うほど殴られ軍事法廷で懲役三月の判決を喰らって、大村海軍監獄に収監された。

軍は鳥取連隊に入れられたが、そこには「地方人」(徴兵された初年兵ら)をいたぶることに異常に熱中する上等兵がいた。中島さんはその上等兵を叩きのめし軍法会議にかけられようとし

に熱中していることを恥じ入ったのか、博才のなさを恥じ入ったのか、ぼくはうかつにも聞きそびれた。

### 少年時からの叛骨精神は 徴用工、軍隊でも失わず

このように書き連ねると、中島さんは単なる「遊び人」になってしまう。確かに中島さんには「フーテンの寅」のような一面があつて、若い頃はしょっちゅう旅に出ては土地土地の女性に一目惚れし、またよくもてていたようだ。寅さんと違って始末に負えないところはプラトニッククラブに終わらず、一時的にせよ世帯を持つたり、前述した「ぼくらの知らない娘」をつくるまでにいたることである。

それはそれで中島秋生という人間を描くには不可欠の物語だが、これについて書くと、一冊の本になってしまし、真面目な本誌の読者に叱られそう

だが、この上等兵の「いきすぎ」は知れ渡っていたことと、分隊長の穩便なはからいで三日間の営倉入りですんだ。あの時代、あの日本軍の中でも、中島さんの叛骨魂は燃え続けていたのである。

「満州」(中国東北地方)から命からがら引き揚げてきた(数千円の前借でしばりつけられていた水商売の女性との恋の逃避行)中島さんは、闇米の買出しをしたりしてしのいでいたが、四八年に戦前勤めていたエアブレーキ社から復職をすすめられる。それも管理職並みの賃金と社宅つきという好待遇である。戦後復興期に入った日本の製造業は人手不足であり、何より熟練工不足であった。腕のよい研磨工だった中島さんは同社から三顧の礼をもつて迎えられたのである。

そして、一九五〇年、分裂していた日本共産党の国際派に入党し、当時御用組合だったエアブレーキ労組の右派

執行部を追い落として執行委員長になった。しかし、それもつかの間、朝鮮戦争反対のピラを工場前で撒いたため、アメリカ占領軍に逮捕され一年半拘留収監され、エアブレーキを解雇される。

## 六十歳で組合結成し 死ぬ直前まで闘った

その後はうどん屋を開業したりするが、五七年から七〇年までの、パチンコ屋の景品買いが一番長く続いた仕事である。しょぼ代を取りに来る暴力団を身体を張って撃退し、暴力団追放の第一号店の称号を得たパチンコ屋の店主は感激し、中島さんと共産党に定期的にカンパをするようになった。ところが共産党は反主流派の中島さんを「反社会的職業」に従事しているとして権利停止処分に付したのである。「反社会的」商売からのカンパは黙って懐中に入れながらである。

戦前から戦後にかけて波乱万丈の人生を送り、格好良く生きた中島さんが、そんな中島さんを許し、家計を支え、三人の娘を育て、ぼくらの我儘を受け入れてくれたのは連れ合いの長谷田とよさんだった。そんなとよさんの苦労と度量の広さに思いを馳せることなく、傍若無人にふるまっていたぼくらは度し難いアホだったと、慙愧に耐えない。

七〇年、中島さんは最後の仕事であり、活動の場であった神戸市都市整備公社に就職する。そして、就職して二年で労働組合をつくり執行委員長になる(これについては第二次『現代の理論』七四年四月号に、ぼくの中島さんへのインタビュー記事が掲載されている)。市の外郭団体は市の二重構造がそのまま持ち込まれている。職員は退職後も事務職か、現業部門でも管理職に採用される。対して現業労働者は現業のままである。しかも現業部門では現役

時代の位階制が残存しており、市は現業のボスを通じて通達、指示を下すのである。市退職者は公社の賃金を年金にプラスするものとして、民間の被雇用者は高齢者の困難な就職状況からして、低賃金でも我慢する。そして市当局は「老人福祉事業」と称して恩情としての雇用を強調するのである。

中島さんは「我々に恩情は要らない。労働者として当然の権利を主張する」と、組合結成に奔走した。結成時十人だった組合員は、当初参加を渋った元市の現業労働者も遅れて参加し九〇%を超える組織率になった。二万五千円だった賃金は十年で十万五千元、週四四時間だった労働時間は三九・五時間になり、労働条件はすべて団体交渉で決めることになった。

中島秋生さんが逝って、早四半世紀のときが過ぎた。酒を愛で、馬と遊び、女性をこよなく愛し、死ぬまで戦い続け、青年のまま逝った人である。